

香は南都東大寺寶物、勅封にて絶て難求由。昔は年に一度虫干として御封を切候由。其節は少は外へ散候事も有之候哉、いつの代よりか虫干も相止、御封を切事なしと也。今以て三貫目餘有之旨申傳候。

一、同氏右近大夫、大坂在番に罷越候儀有之候。其節京都に來歴正敷蘭奢香九分致所持候町人有之、賣可申由及承り手筋を以て相尋候處、其頃の香聞無紛と極置候に付、双の儀承候へば二千双の由申候。餘り六ヶ敷事に付、家來共無用の由申候へども、至て大望故千二百双迄求可申と密に申越候得共、少も減がたき由申越候。其沙汰家來承傳達て諫候故、無是非致延引無念の由、傳左と右近咄候由。傳左被申開候。以上。

午十二月

某外兄弟の子八木世繼子許、蘭奢香の由にて六分有之候。世繼近年浪人の身故、某へ預け可然方へ進申度旨に候。此趣を前田帶刀殿へ爲御知申、蘭奢の信偽難辨候故相尋候得ば、右の趣被仰越候。左の趣も書中に相見え候。蘭奢香の儀被仰下致承知候。及承候儀書付申進候。至て古

き香にて候故、甚敷匂は有之間敷哉と存候。如仰當時誰も正眞を承候者無之候故、偽眞不分明に候。御預り置被成候香御試、別紙書附の趣も御考御覽可被成候。義政公の時代も數百歳過候儀に付、此節正眞の六十一種は難有事と存候。只今も賣物に古き銘を書付置候香度々有之候。皆似せ事に候。先年鷓鴣班と申名香試候儀有之候。是は加藤清正所持の由。當公方様へ被差上候人有之、御城に御座候。其後花橘と申香試申候。是は近衛關白殿御所持、一位様に御座候由。此二種は拙子共不ながら無類の名香、正眞にて可有之哉と致推察候。其外六十一種の内試候事も無御座候。以上。

前田 帶刀

一、南部家より改名の交渉

當冬南部修理大夫より被仰達候は、私先祖へ大納言利家公より、御一字被下置候。此度私實名相改申度候間、不苦思召候はゞ相改度由被仰越候に付、被入御念候儀、此方より御用被成候様にとは、難申入事に候。御勝手次第の儀と存候旨被仰遣候處、左候はゞ利信・利視此内に相改度由申來候。いづれにても御勝手次第と被仰遣候。利視に改申旨申來候。

十二月二日修理大夫并御嫡龜五郎殿初て御出に付、御太刀・馬代御持參有之、御盃事の上に尻掛則長作御刀被進候。代金十五枚也。

關東陣之時、利家公御引被遊候故、代々の宗も立候旨。此時關口の龜十本被遣候、其時分御一文字も被遣候、過分に金子も被遣候事有之に付、子々孫々迄御馬進上有之様に被申置候。此度あなた蘭奢申候。

一、尾張光春候隱居被仰付事

元文四年正月十二日、尾州御家老五人成瀬半人正・成瀬大和守・成瀬顯前守・竹腰忠勝守・川村兵馬殿中へ被爲召、尾張殿段々御不行狀の趣被仰出、急御指扣御慎候様に被仰渡候。尾州御邸門々閉之、長屋の窓并火の見櫓迄閉之候。翌十三日松平安藝守殿御登城被成候様に、十二日御老中列判の奉書にて申來。御登城候處御前へ被爲召、以御書立尾張殿への上使被仰渡候て御隱居、御家門四位少將義隆但馬守殿御家督被仰付、被稱徳川但馬守候。副使兩輩松平播磨守殿・松平大學頭殿也。安藝守殿御復命の節、尤直に登城の處大儀の旨上意有之候。御前へ御出の節祇候の輩後守殿・讃岐守殿也。上使の儀安藝守殿へ被仰付候は、尾州御縁者故の由に候。尾張公御家督以來、段々御不行狀の上候に如此被仰付候儀、御延引難被成趣有之、年頭御規式未相

濟内に候得共、如此被仰付候か。十二日紀州公へ本多中務大輔殿、水戸公へ松平右京大夫殿被遣候由。將又十三日糺町の御下屋敷へ御移り、急度外へ徘徊無之様に被仰出候。一、高昌善太夫來狀

一昨十二日尾張中納言様より、佐渡守様御使者有之、申置罷歸候に付、爲御答昨十三日私御使に罷越候處、辻番より裏付上下着用仕候御歩目付などより宜躰の者一人罷出、慎の儀有之御見舞・御使共御斷申候旨申開候に付、名相尋候へば鈴木貞四郎と申由申聞、御使不相勤罷歸り右の段申上候。表門・大門・小門共に立、御勝手門も大門・小門共に立候て、御長屋の窓共不殘、火見番所も閉ぢ有之候。御門前町屋にて相尋候へ共、御慎の品相知不申候。直に紀州様へ御使相勤候處、紀州御邸少し此方に尾州御屋敷有之、御長屋上下小屋々々に、毎も淨瑠璃小歌にて罷在候處、窓上下共に不殘閉ぢ、大門・小門共に立候。紀州様にて御使相勤候へば、中將様御登城の旨取次申候。十三日の御登城不時と見候。尾州御上屋敷御勝手小門より、侍一人早乘にて罷出候。追付小門立申候。此外に先づ相替品相見え不申候。罷歸右の